

礼節と規範を重んじる学校 ～挨拶・返事・そうじ・歌声を合言葉に～

山武市立成東中学校長 越川 幸夫



1 はじめに

本学区は、昔から学問の盛んな地域で、アラギ派の歌人「伊藤左千夫」の生家がある。産業は農業が中心であり、近年「観光いちご」が注目されている。

また、都市部への通勤者のベッドタウンという面も持ち合わせながらも、人口は減少傾向にある。子どもの教育に関して、とても熱心な地域で、学校にも協力的である。学校行事や奉仕作業などには、多数の保護者が積極的に参加し、地域との密接な連携による学校経営が可能となっている地域である。

2 本校の教育目標を達成するための取組

本校の教育目標は、「礼節と規範を重んじ自ら学び自主的・自律的に生きる心豊かでたくましい生徒の育成を図る」である。この目標を達成するために、「挨拶・返事・そうじ・歌声」を生徒の行動目標として取り組んでいる。生徒として、人として大切なこと、誰にでもできることを毎日積み重ねている。

(1)心をつなぐ挨拶

①成東駅前での朝の挨拶運動

地域の福祉協議会、学区の小学校・高等学校と連携して、年3回（9日間）ボランティア活動を行い、延べ190名の生徒が参加している。

②朝の挨拶運動

生徒会を中心に校門で行っている。教職員は校門指導を、朝と帰りに全員で行っている。

(2)すがすがしい返事の励行

日頃の授業をはじめ、全ての学校生活の場面での実践

(3)心を磨くそうじの励行

①日頃の清掃活動の充実

②ボランティアトイレ清掃

地域の方々（NPO「日本を美しくする会」の山武掃除に学ぶ会）の指導により、3年生を中心に校内のトイレ清掃を通して母校に対する愛情を涵養し、ボランティア精神を培うために実施している。本校の伝統行事でもある。

(4)豊かな心と和を育てる歌声活動の充実

①年間を通しての歌声活動

朝・帰りの会において、音楽委員の活動として年間を通して行う。

②生徒の運営による音楽集会

③合唱祭の開催

日頃の活動を発表する機会。この行事に生徒は、意欲的に取り組んでいる。保護者の関心も高く、参観者も多い。

3 おわりに

「成東中学校の教育に責任を持つ」これは、本校教職員の合言葉である。これまで述べてきた取組は、どこの学校でも当たり前に取り組んでいるものであるが、先輩の校長先生の「繰り返し、当たり前を繰り返し」という言葉を常に心に、生徒にとっては「行きたい学校」、保護者・地域の方々にとっては、「行かせたい学校」を目指し、今後も取り組んでいきたい。

提

言

「命の授業」で伝える、 自己肯定感と人としての幸せ

いまにし のりこ
児童文学作家 今西 乃子



児童文学作家という仕事の傍ら、著書を題材に用いた「命の授業」を、小学校高学年児童、中学校生徒を中心に9年ほど前から行っている。執筆する分野がノンフィクションであるため、事実に基づき、写真を用いて授業展開する。内容は、捨てられた犬の話だ。授業時間は小学校高学年対象でも2時間（90分）。休憩時間は挟まない。一見この授業は動物愛護という視点に思われがちだが、子どもたちが自分自身と正直に向き合い、ありのままの自分、今の自分を肯定できるかどうか、またできないのなら、自己を肯定できるようになるにはどうすればいいのか、その気づきを促す、いわば子どものための自己啓発授業だ。ただし、対象が主に小学校高学年や中学生のため「自己肯定」という言葉は用いず、「あなたは自分が好きですか」という問いかけから授業に入る。

厳密に言うと「自己肯定感」と「自分が好きかどうか」という意味は微妙に違うと思うのだが、「自己肯定」や「自己価値」という言葉を正しく理解できる子どもは少ないし、質問の意味がわからなくては授業にならない。

そこで「自分のことが好き？」という簡単な言葉に置き換えて質問することになっている。

ところがこの言葉を用いても、質問の趣旨がうまく児童に伝わらない。質問の意味がやはり理解できない。言葉では理解できても、頭で理解できないのである。「自分好きってそれ、何？」という具合だ。どこの学校でも同じ反応である。そこで、理解を促すため少々

補足説明する。

「自分が好きというのは、他の人よりお金持ちの家に生まれたとか、容姿がいいとか、勉強ができるとか、そういったことではないよ。みんなは生まれてから、小学校6年生なら12年間、いろんな人と話し、いろんな人と行動を共にし、たくさんの人と接してきました。その間に自分が、他の人に対してとった言動、行動を、自分自身が好きと言えるか、褒めてあげられるかということです」

そして再び同じ質問。

「どうですか？みんなは今の自分のこと、好きって嘘偽りなく言えますか」

以前、数校の小学校高学年児童に目を閉じるよう指示した上で、好きか、嫌いか、挙手を願い出たところ「嫌い」と答える児童が圧倒的に多かった。様々な調査でも日本人が、自分には価値があると認めた自己肯定感の割合は欧米や中国に比べて低いことは広く知られているところだ。

私たち子どもの教育に携わる者はみな、日々子どもの幸せを願い教育と向き合っている。その「幸せ」と「自己肯定感」は一对のものであり、自己を肯定できない生き方に、幸せはない、というのがこの授業を始めたきっかけである。例えば、自分が嫌いで、自己肯定感が低い、自分に価値がない、無能だと思っている子どもが「幸せ」を感じているだろうか。答えは明らかに「ノー」だ。ならば「自己肯定感の低い日本人」という事実を無視して、子どもの幸せを願う教育などあり得ないと私は思う。そこで次の質問をする。

「この中で大きくなったら不幸になりたい

人いますか」

子どもたちは鼻で笑い、「いるわけないじゃん」と答える。

ここまで言えば、教科教育以外で、子どものためにやるべき教育は何かが見えてくるはずだ。

それがこの「命の授業」である。

では、どうして犬の話が、子どもの自己肯定感と幸せへの気づきとつながるのだろうかー。

「命の授業」は、飼い主に捨てられた犬たちが動物愛護センターに収容され、二酸化炭素ガスで殺処分される話から始まる。授業で使用する写真は犬たちが処分されたのちの死体、焼却炉の中で焼かれる写真も含まれる。

かなり残酷だが、全て今の日本で起こっている現実だ。この話をする時、子どもたちは真剣な顔で耳を傾け、時には涙を流し、感想を求めると「かわいそう」と言う。

言っておくが、この授業の目的は、子どもたちの犬たちへの同情を得ることではない。誰もが涙を流す「かわいそうな現実」を作っているのは誰なのか、と考えてもらうことだ。

この現実を作っているのは紛れもなく私たち人間なのである。

このタイミングで、子どもたちに問う。

「命を簡単に傷つけたり、捨てたりする人たちって、自分のこと好きかな？」

この瞬間、子どもたちは一斉に首を左右に振る。子どもたちは、誰かを傷つける自分が嫌いだということだ。ならば、どんな自分なら好きな自分になれるのかー。

授業は、一匹の子犬の話に移る。子犬は人間から虐待を受け、放棄されたが、別の人間に救い出され新しい飼い主のもとへ旅立つ。

子犬はボロボロだった捨て犬時代から、ピカピカの犬へと変化していくが、写真を見ている子どもたちの顔も正比例して笑顔になっていく。

「命をボロボロにするのも人間。命をピカピカにするのも人間。みなさんが同じ人間として生まれてきたのなら、どちらの大人に

なったほうが、自分のことを好きって嘘なく言えますか」子どもたちの顔に迷いはない。「好きな自分・なりたい自分」が明確化された瞬間だ。

ここで導き出された「気づき」は、犬という動物だけではなく、全ての生命尊重に繋がっていく。「友達をいじめる自分は好きか、嫌いか」「悪口をいう自分はどうか」

難しい事ではなく、まずは、嫌いな自分と一つずつサヨナラすることだと伝えたい。

世間では、友達をいじめている子どもに対し、「相手の気持ちになってみなさい」と指導するが、「友達をいじめている自分が好きか」と聞いてみるのも効果的かと思う。

人はみな他人のことより自分のことに思考の重きを置くものだ。

中学生ともなれば授業では「自分が好きか、嫌いか」だけではなく、「どっちの自分になった方が、自分にとって得か」という問いかけもする。

「誰かを傷つける自分は、自分自身にとって得になるかどうか」という具合だ。

そして、授業の最後はこの一言で終わる。

「一日、一回、夜寝る前に自分自身に聞いてみよう。今日の自分は好きだったかな？」

生きることの喜びは、命を慈しむ心をいかに持つかに尽きる。

真の幸せとは、与えられることではなく、誰かを大切にできる自分と出会うことから始まるのである。その出会いのきっかけを与える役割が学校の道德教育であり、また児童文学作家である私の仕事であると思っている。

誰かを愛しいと思える自分は、間違いなく好きな自分だ。そして、誰かを憎んだり、蔑む自分は、間違いなく嫌いな自分なのである。

子どもたちは、そういった葛藤の中で自問自答し、大人になっていく。

大切なのは、子ども自身が日々自分と向き合い、何が正しいのか自分に問いかける習慣を身に付けることだ。